

受講番号 18044 学校名 四万十高等学校 氏名 和田 美穂

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年1、2H 生徒数 10 名
 科目名 英語 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 Power On English I(東京書籍)

クラスの様子・特徴

ほぼ全員が英語を習い始めてまもなく、読み・単語・文法でつまづいている。常時指導を必要とする生徒が2～3名おり、英語学習へのモチベーションは低い。しかし、もう一度ゆっくり基礎から学習し直したいという気持ちから意欲的に取り組んでいる生徒もいる。

問題の確定

中学校の既習単語(読み・書き)・既習文法が定着していない。英語に対する苦手意識が先行して意欲的に学習できない生徒がいる。

予備調査

A 授業の観察

1学期は、積極性が見られたり、音読の声が大きくなってきたり、プラスの変化が多く見られた。2学期は、1学期に引き続き積極的に取り組む生徒もいる中、私語が目立ち始めた。しかし、多くの生徒は前向きに取り組んでいる。

B 生徒による授業評価

中学校の時と比べて英語がわかるようになり、楽しくなったと感じている生徒が数名いる。また、授業を通して多くの生徒が「できるようになった」と実感することがあったようだ。授業の進め方は今のままで良いのだが、宿題の重要性を理解できない生徒もいる。

C 学力データ

12月に行った望月式語彙サイズテスト(2000語)では、平均937語の語彙数で、最高1433語、最低367語であった。定期テストの平均点は、48.3点→54.8点→57.4点→60.7点と徐々に伸びてきている。

リサーチ・クエスチョン

英語に対して苦手意識を持っている生徒が多いクラスで、どのようにすればより多くの語彙を定着させ、苦手意識を取り除くことができるのか。

仮説・実践・検証

仮説1

「できること」「得意とすること」を自覚させ、自信を感じることができればそれが英語学習への強いモチベーションになるのではないか。

実践1

読める実感を与えるため、目的を持たせて音読に力を入れた。また、英文が理解できることを実感させるため、フレーズ・リーディングを導入した。自己評価カードを使い、生徒自身の振り返りを毎時間させ、指導者は生徒が気づいていないプラスの変化やアドバイスをを行った。

検証1

「力がついてきた」と感じるものがあつたかどうかの質問では、2学期には無回答の生徒が誰もおらず、全員が何かを感じたようである。1学期の結果と比べると、「単語を書く力」「意味のわかる単語の数」を挙げている生徒が増えた。また、普段の会話などでも「中学校の時とはわからなかったことがわかるようになったので、もっとがんばりたい」と意欲的な発言をする生徒がおり、その生徒達にとっては実践内容がうまく働いたと言える。

仮説2

活動に変化を持たせ、定着させたいことを繰り返し述べよりスムーズに理解することができるのではないか。

実践2

カードを使ってゲーム性のあるものや集中して短時間で覚える緊張感のある活動を組み合わせて行った。授業に簡単なライティング活動(条件に合った英文を書く/与えられた絵を元に英文を作る/自分のことについて新出文法を使って書く/新出文法を使って人や物を説明する)も取り入れ、テストには毎回表現の問題を出した。

検証2

どの活動もその時間内は効果的であるように感じた。特に、制限時間内に新出単語を覚えて発表するという緊張感を伴うものは全員が集中して取り組み、短時間でほぼ全ての単語を覚え満足感を感じているようだった。ゲーム性の高い活動も効果を発揮したが、ペアやグループを組む際に人間関係の問題が絡み、うまく作用しないこともあった。

仮説3

1レッスンを通じて何度も繰り返し、確認することを増やせば定着につながるのではないか。

実践3

その日の授業のポイント(できるようになってほしいこと)や活動の目的を生徒に口頭で伝え、4技能を使うことを意識して単語やポイントを繰り返し確認した。各レッスン(パート)の内容理解が終わった後、学習したところの音読テストやペアでの単語テスト(口頭)もまとめとして行った。

検証3

残念ながら毎時間復習することができなかった。定着度を確認する単語テスト(口頭)も行ったが、それにつながる取り組みが不十分であったため定着度を測ることができなかった。音読テストでは、ほぼ全員が正確に読めるようになっていたことが確認できた。音読テストの評価が5段階中1(読み間違い9～10個)となっている生徒も、1学期と比べると確実に読める単語が増えてきていて、そのことを本人も実感することができていた。

研究の成果

「より多くの語彙を定着させる」という点では、読める単語や意味のわかる単語を中心に、1学期と比べると少しずつ語彙も増えてきている。しかし、「書く」となると中学校で習得しておくべき基礎的な単語も怪しい。「苦手意識を取り除く」という点では、英文の構造がわかったり、読めるという自信がついた生徒もあり、主に仮説1の有効性が検証されたように思う。仮説2、3もある程度はその有効性が検証されたが、取り組みに不十分な点があり、改善点が残った。しかし、英語が好きな生徒が出てきたことは研究の大きな成果である。

今後の授業改善の課題

各パートの単語・文法を1レッスンを通じて定着に向けて指導することをもっと意識した授業計画を立てる。単語を定着させるために4技能を使って練習や復習を授業に取り入れたが、今ひとつ定着に結びつかなかったのは確認の回数が少なかったことが考えられる。口頭による単語テストも段階的に何度か確認する機会を設ける。また、「書ける単語」が増えるように、単語テストのあり方を考え、力につながるよう効果的に取り入れる。